

館林キリスト教会 デボーションノート（2024 年）

11月1日 今日の通読箇所 サムエル記上10：1～13

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU101.mp3>

サウルはサムエルの油そそぎを受けて、イスラエル初代の王の任命を受けた時、さすがに恐れととまどいを感じたと思う。神は三つのしるしを与えて、彼の信仰をはげまして下さった。第一にサムエルの言葉どおりに、さがしていたろばが見つかったこと。第二に、神殿に献げるつもりで運ばれて来たパンが、サウルに提供されたこと。第三に、預言者の一群にまじってサウルも靈感を受け、預言したことである。最後のものは、サウルを知る者にとって、特に奇異なしるしであったので、後日、ことわざになったくらいだった。

11月2日 今日の通読箇所 サムエル記上10：14～27

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU102.mp3>

いよいよサウルはイスラエルの王として、国民の前に立った。恐らく身長が高く、勇武、まことにりっぱな人物であって、前から候補者の一人であったと思うが、それと共に初心(うぶ)で謙遜で、最初は隠れていて出て来なかった。彼に対して国民の大部分が何となくそらぞらしく、すぐに具体的に王様らしくはなれなかったが、案外無頓着で、さっさと家にかえり、もとの仕事に精を出しながら黙々と時節を待つところなど、本当に信仰的な好青年だった。

11月3日 今日の通読箇所 サムエル記上11：1～15

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU111.mp3>

アンモン人によって、ヤベシ・ギレアデが包囲された、というニュースが入った時、ギベアの人たちは悲しみ恐れて泣いた。こういう不信仰、敗北感、孤立主義が、今日までイスラエルが外敵にあなどられ、勝手に侵略をされていた理由なのである。しかるに同じニュースはサウルを奮起させた。そしてただちにイスラエル諸族に、団結と協力と出兵を求めた。と言うよりも命令した。その結果、みごとにヤベシ・ギレアデを救い、これがサウル王の初手柄となった。

11月4日 今日の通読箇所 サムエル記上12：1～18

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU121.mp3>

サウル王はいよいよ実際的かつ積極的に、王国の建設に着手することになった。ヤベシギレアデ戦争の実績によって、全国民の一致した支持と協力を得ることになったからである。ここでサムエルは、一応直接に国民を指導する責任の半分を解かれたことになるので、サウル王と国民に大切な訓辞を与え、長いイスラエルの歴史を示し、信じ従う者のみを助け祝福し給う、神の恵みのみ業を思い起こさせ、つづいて神様に対する信仰と服従を誓わせたのである。

1 1月5日 今日の通読箇所 サムエル記上12：19～25

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU122.mp3>

イスラエルが王政に移行するのは自然であったが、神の導きを求め、時期と方法を考えるという態度に欠け、急いで制度を新しくし新しいリーダーさえ立てればそれで万事 OK、という、人々の不信仰軽卒はまずかった。しかしいずれにしろ結果としてはサムエルの時代は終わった。いま彼は解職隠退の老後においても、二つの事は決して止めないと誓った。その一つは「教えること」他の一つは「祈ること」であってサムエルにとっては、これらをやめるのは、罪であるという自覚があった。

1 1月6日 今日の通読箇所 サムエル記上13：1～18

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU131.mp3>

長年イスラエルを属国あつかいにして来たペリシテ人は、今やサウル王を立てて独立しようという勢いになって来たイスラエルに対して緊張し、イスラエルもまた徹底抗戦の準備を進め、再び決戦の場面となった。この時サウル王は、サムエルとの約束を守り、礼拝がすむまで進軍開戦をひかえていた。しかしぐずぐずする間に、長い緊張恐怖に耐えかねたイスラエルの民兵たちの中には、こっそり逃げ去る者が増え、いわゆる戦機が失われるのにあせって、とうとうサムエルを待たずに自分で燔祭をささげ、勝手に礼拝を執行したが、これが彼の第一の失敗となった。

1 1月7日 今日の通読箇所 サムエル記上14：1～15

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU141.mp3>

サウルの子ヨナタンは、サウル一族の勇武の血を受けただけでなく、非常に信仰に厚い青年だった。両軍にらみ合いの状態の中から開戦のキッカケを作ったのも彼だったし(13章3節)今度はまた勝利のキッカケを作ったのだ。「多くの人をもって救うのも少ない人をもって救うのも、主にとっては何の妨げもない」というその言は、後世まで、神を信ずる者の勇気を奮い立たせる言となった。本当にゲーテのいうように「勇気がなければ何もない」場合も多いのだ。

1 1月8日 今日の通読箇所 サムエル記上14：24～35

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU142.mp3>

ヨナタンによって戦争が有利に転回し始めると、それまで恐れていたサウルは、逆に興奮してせっかちになり、一気に完全な勝利を得ようと、あせったあまり、兵士たちに作戦中の食事を禁じた。食事の時間も惜しかったのだが、更にこうすることで、全軍の誠意熱意を神様に見てもらおうと、誓いを加えたことなど、すでにサウルの心には、神に従い神にまかせる信仰はなくなり、やみくもな自分の気持ちだけが先に立ち、やり方は大分迷信じみたものとなって来た。

1 1月9日 今日の通読箇所 サムエル記上14：36～46

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU143.mp3>

サウルは激越な性格で、言ったことはあくまで通す。ヨナタンがサウルの命令を知らず、野生の蜂蜜を食べて命令違犯をしたというので、王子であり、戦勝の功労者であるにもかかわらず、処罰しようというのは、あんまりひどすぎる。しかもそこに神の御名を出して来るのだから、迷信的、独断的態度は恐ろしいものだ。人々はこれに反抗してヨナタンを助けたが、あまりのことに白けて戦意を失いサウルの意気ごみとは反対に、不徹底な勝利のまま、イスラエル軍は引上げてしまうことになった。

11月10日 今日の通読箇所 サムエル記上15：1～23

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU151.mp3>

ペリシテ、アマレクからの解放独立ということは、イスラエルが王制という形で実現した挙国体制の、そもそもの目的だったから、次の作戦は当然アマレクに向けられた。サウルはこれらの作戦を、神の命令によって実行したのであるが、しかし今度の場合も、サウルの服従はいつものように不徹底で、イザという時に地金が出て、神のみこころよりも、自分の判断方針が先に立つ。とうとうこれが彼の致命傷となった。この前の時は、恐怖焦燥のあまりという事情もあったが、今回は誇りと物慾が動機だった。まことに芳しくない推移進展ではある。

11月11日 今日の通読箇所 サムエル記上16：1～13

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU161.mp3>

サムエルの子供たちは愚かであって、人々の非難を受け、サムエルの後継者とはなり得なかった。サムエルによって任命されたサウル王は、不信仰不従順のため、神の祝福を失い、王として不適格であることは、すでに歴然としている。サムエルもうイヤ気がさして、不信仰、人間ざらいになっても仕方がないところだが、今また神の示しに従い、少年ダビデに任職の油をそそぐ。しかも危険なのでサウルには秘密だ。老サムエルの信仰と勇気、忍耐とねばりは本当に大したものだ。

11月12日 今日の通読箇所 サムエル記上16：14～23

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU162.mp3>

悪魔が人を誘惑する時は、人に大胆を与えて神をあなどらせる。さて人が神に背いて罪を犯すと、今度は、自責と恐怖と絶望で人の心をさいなみ、再び彼が神に立ち返ることがないように仕向ける。ここに「神から出た悪霊」というのは、自らその道を選んだサウルが、悪魔に苦しめられているのを神がしばらく放置なさる、その状態を言うのかも知れない。少年ダビデはその反対で、推薦されてサウルの従僕となるや、その純粋な信仰と美しいさんびは、憂愁のサウル王をなぐさめた。未来の大ダビデ王は、こういう奉仕者として聖書に姿をあらわす。

11月13日 今日の通読箇所 サムエル記上17：1～18

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU171.mp3>

ペリシテの巨人ゴリアテは身長三メートル、上から下まで青銅のよろいで武装し、穂先の目方だけで七キロもあるやりをしごいて、イスラエル軍に挑戦すること四十日、サウル王はじめイスラエル全軍は萎縮して声も立てず、敗北は時間の問題と見えた。彼は教会の戦いの前に立ちふさがる悪魔と、この世の力の象徴である。我々が信仰生活を全うするのも、伝道して人を救いに導くのも、この場合のゴリアテに勝つのも同じ困難な戦いで、ただ神の力に頼る以外にないのだ。

11月14日 今日に通読箇所 サムエル記上17：31～49

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU172.mp3>

ダビデはサウル王が貸してくれた、立派なよろいかぶとを辞退した。どんなに立派に見えても、使いなれず、身についていない物はかえって邪魔だ。そして日ごろから使いなれた石投げで、ゴリアテに立ち向かうことになった。そのかわり熟練した手で、なめらかな五つの石を拾って用いたのである。彼は「神のみ名によって」ゴリアテを倒し、イスラエルを勝利に導いた。我々は外見の立派な、大げさな武器で戦う必要はない。子供っぽくても、しろうとらしくても、使いなれた手持ちの武器が良い。そして我々が「主のみ名」によって立つ時、必ず勝利が与えられるのである。

11月15日 今日に通読箇所 サムエル記上18：1～19

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU181.mp3>

ダビデがゴリアテを打ち殺したことは、イスラエル軍大勝利のいとぐちとなった。過去に何回も同じような手柄を立てた王子ヨナタンは、ダビデを尊敬し、期待し、また深くダビデを愛した。その友情は終生変わらず、旧約を通じての美談となってゆく。これに反してサウル王の心には、国中に高まってゆくダビデの人气が、苦い嫉妬心の刺激となって受け取られた。他人の成功幸福の話は、ともすれば人の心に、嫉妬を呼び起こすものだが、この場合のサウル王の悲劇は、祈りのうちに、その心を神にきよめ整えて頂くことができなくなっていた事実だった。

11月16日 今日に通読箇所 サムエル記上18：20～30

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU182.mp3>

ダビデは今や、サウル王の宮廷において、人気絶頂のスター的軍人だった。サウル王は彼と、王女メラブとを結婚させようとしたが、謙遜で慎重なダビデは、これを辞退した。ところが今度は、妹王女ミカルが、深くダビデを愛し慕っている。ミカルとの縁談が始まった。ダビデはもともと愛に感ずる人物である。しかもこの縁談には、ダビデの勇氣と戦斗力をテストするための、サウル王の軍事的命令が抱き合わせになっている。勇敢なダビデは引っ込んでそれを見送ることができない。とうとう命令を実行し、かつミカルと結婚することになった。以後ダビデは危険の多い国境警備の任務につくが、これもまたサウル

王に下心あつてのことだった。

11月17日 今日の通読箇所 サムエル記上19：1～17

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU191.mp3>

精神分裂でもあるまいが、今やサウル王の精神も言動もすでに分裂している。悔い改めない罪の呵責のために、霊的な暗黒の中にいて、神に祝福、助けを祈ることができず、信仰の確信もない。ヨナタンの忠告を聞けば、国王としての義務と責任に目覚める。この調子で、筋違いな嫉妬でダビデを憎み攻撃して行くようでは、やがては人望を失い、宮廷も国家も治まらなくなって、結局国王としての自分の将来のためにならない。それもよくわかるのだ。しかしそれでいて、ダビデに対する嫉妬がムラムラとして来ると、自分でもどうにも押さえることができないのだ。

11月18日 今日の通読箇所 サムエル記上20：1～17

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU201.mp3>

ダビデは罪もないのに、サウル王の追求を恐れて逃げまわらなければならない。いわゆるお尋ね者になってしまった。ひそかにヨナタンを訪問して、自分の苦しい立場を訴えると、ヨナタンは命がけで父サウル王に対して、ダビデを弁護して見ることを約束した。その結果、もし父王のダビデに対する憎しみが変わらないようなら、ダビデの亡命に賛成し、かつ援助を惜しまないことを約束した。本当に、持つべき者は良き友である。ヨナタンはまた、最近の父サウル王の様子から、やがてサウル一家の運命が決まることを予想し、しかし自分は父の子として、最後までサウル王と運命を共にすべきことを、悲しくも決意していたのである。

11月19日 今日の通読箇所 サムエル記上20：26～42

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU202.mp3>

気の合った親しい友達との交わりは人生の喜びであるが、愛別離苦という言葉があるくらいで、人と別れるのは悲しい。今ヨナタンとダビデは、まことに余儀ない事情で相別れなければならなかった。ギベアに近い野原での別離のあとの二人は、ほとんど再び、合うことはないのである。やがてヨナタンは、父王サウルと共に戦死して、ダビデは国王となるが、二人の友情が本当に実を結び、自由で妨げられることのない、長い愛の交わりが許されるのは、天国においてである。

11月20日 今日の通読箇所 サムエル記上21：1～15

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU211.mp3>

これからダビデは、泣いても泣き切れぬ、恐ろしく孤独な年月に耐えなければならなかった。今よろめくように祭司をおとずれ、秘密の公務であると偽って、供えのパンでわずかに飢えをしのいだのもやむを得ない。五尺の体の置き所のないまま、心ならずも異邦の王に頼ったが、そこでも身の危険を感じ、みっと

もない狂人のまねを真剣に演じて、かろうじて逃れたなど、身に覚えのない迫害と追求を避けつつ放浪する姿は、何とも気の毒の至りであった。

11月21日 今日の通読箇所 サムエル記上22：1～23

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU212.mp3>

サウル王の悪政の下では、苦しみ不満を抱く者も多かった。彼らは、かねがね尊敬信頼するダビデが、自分たちと似たような悲劇に陥るのを見て、一つはサウル王を見張り、一つはダビデのために一肌ぬぐつもりで、次々とダビデのもとに集まって来たので、勢いのおもむくところ、ダビデはいつの間にか、相当な徒党の首領となるに至った。それにしてもダビデを追うために一国家の兵力を手兵の如く動員するのみか、ダビデの逃亡に手を貸したという訴えに対して、深く実否をただしもせず、こともあろうに、今のサウル王は狂乱状態という他ない。「嫉妬は骨の腐れだ」と言われるが、本当に恐ろしいことだ。

11月22日 今日の通読箇所 サムエル記上23：1～18

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU231.mp3>

サウル王はダビデを追いかけるのに忙しく、兵隊はもっぱらそっちの方に動員されていて、肝心の国王本来の職務（国境の町々を外敵の侵略から守ること）などは、おさんからの有様だった。今、ダビデとその一党は、無冠、無報酬の身をもって、神より受けた命令に従い、私設パトロールとして国境を巡回し、町々を守った。それにもかかわらず、ケイラの町の人々のように、サウル王を恐れ、あるいはへつらって、ダビデを裏切り、サウル王に渡そうという者もいた。その間、危険を恐れず、もう一度だけダビデを訪れたヨナタンの友情は美しい。

11月23日 今日の通読箇所 サムエル記上24：1～16

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU241.mp3>

ダビデは少年時代、すでに国王として選ばれ、サムエルによって油そそがれた人物である。サウル王はすでに神の祝福を失い、国王の職務を怠り、ただ自分の地位と権勢に執着し、軍隊をも手兵化している。これに反し、今や力に応じて、王の使命職務を、実質的に努めているのはダビデである。しかも理由なしに命をねらわれているダビデには正当防衛権もある。しかしダビデはチャンスがあっても、サウルに手向おうとはしなかった。そして自分の生命も、使命責任も、サウル王の裁きも、一切神にまかせた。

11月24日 今日の通読箇所 サムエル記上25：1～17

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU251.mp3>

ダビデは集って来た数百名の手下をひきいて、私設国境パトロールを続けていたので、サウル王の怠慢にもかかわらず、国境の人々の生活は安全に守られた。これに感謝した有力な人々が、ダビデとその一党のために食糧その他を提供し、生活をサポートしたのは自然である。ところが中にはナバルのような人物がい

て、いばったり欲ばったりするだけで、ダビデに対して、一向感謝の態度を示さず、協力しないものもいた。本当に、「馬鹿（ナバル）につける薬はない」と言うものだ。

11月25日 今日を通読箇所 サムエル記上25：18～38

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU252.mp3>

ナバルの恩知らずと無礼に対して、ダビデとその一党が怒ったのは無理もないが、さればと言って、ナバルの家を襲い、人を殺し、略奪するのは良くない。それでは神の祝福も、人の信頼と指示も失い、後にダビデが国王になったとしても、これはその汚名となり、良心の痛みとなって残るのである。ナバルの妻アビガイルが、ダビデに忠告したのはそれであった。ダビデは彼女の言に従い、怒りの勢いにまかせて同胞の血を流すという、とんでもない間違いから守られたのであった。「正しい人の口は人を救う」箴言12章6節

11月26日 今日を通読箇所 サムエル記上27：1～12

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU271.mp3>

いよいよ身の危険を感じたダビデは、よんどころなく国を出て、年来の敵国であるペリシテの王に頼った。その間、時々部下をひきいて、ともすればイスラエルを略奪しようとする、異邦の部落を襲撃した。そして帰って来ると、ペリシテの王には「私はサウル王に敵対しているので、イスラエルの町を襲撃して来たのです」と、うその報告をしてごまかしていた。しかし、こんな危い綱渡りいつまでも続くはずはなく、やがて本当に進退きわまる時が来る。事情まことに気の毒ではあるが、これはダビデの失敗であった。

11月27日 今日を通読箇所 サムエル記上28：3～20

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU281.mp3>

サウルがその心をかたくなにして、霊的暗黒の中に生活する間、神の祝福が失われてしまったことは、誰の目にもあきらかとなり、いかに無理な努力を重ねても、もはやあらゆる方面で行き詰まり、すでにその運命はきわまったのであった。その中で、サウルは、かつての信仰の恩師であったサムエルを慕って、自分が追放した口寄せの老婆を探してでも、サムエルの言を聞こうとする、その心根はあわれである。しかしサウルがサムエルから聞いたのは、結局、神の裁きの宣言であった。我々も、「罪の惑わしによって心をかたくなにせぬよう、今日という日々に、互に励まし合おう」ヘブル3章13節

11月28日 今日を通読箇所 サムエル記上29：1～11

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU291.mp3>

ダビデは危険を避けて亡命はしているものの、かつて一度も、サウル王に刃向ったことはない。サウルはイスラエルの王で、神によって定められた秩序の代表者であるからである。しかるに今や、ペリシテ軍の一武将として、公然戦場で、サウル王と戦わねばならないはめとなった。幸いに他の將軍たちの猜疑心

によって、前線から外されたが、読んでいる我々でも冷や汗の場面だ。こういうジレンマに陥らぬよう、我々にとっても、日々の祈りと注意は大切である。

11月29日 今日の通読箇所 サムエル記上30：1～20

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU301.mp3>

アマレク人は、火事場泥棒のような遊牧民で、戦争のうわさを聞くと、すぐに獲物を求めて、野良犬のように出て来る。今、早速、ダビデが出陣して手薄になったチグラグを襲って略奪した。ダビデのあいまいな態度は、すでに人々の信頼を失いかけていたので、この損失は、ダビデとその一党に結束に取って致命的な結果になりかねなかったのである。ダビデはすぐにアマレク人を追跡して報復し、奪われた家族や財産を取り戻すことができ、やっと事なきを得たが、さすがダビデも、亡命生活はもう限界で、これ以上はもちこたえられ相もない。しかし今、神は彼の為に「のがれるべき道」を備えて下さったのであった。

11月30日 今日の通読箇所 サムエル記上31：1～13

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/09SAMU311.mp3>

サウル王とユダは、旧新約を通じて不思議な人物とされている。二人とも神の恵みを深く経験し、のちに神をはなれ、二人とも悲惨な最後を遂げたのである。これらは「我々に対する訓戒」となり「立っていると思う者が倒れぬよう」気をつけることをうながしている。コリント第一、10章。暗たんたるこの章の中の一つの美談は、前にサウルによって救われたヤベシ・ギレアデの人々が、昔の恩義を忘れず、命がけで敵陣を突破し、城壁にさらされていたサウルの死体を奪って、手厚く葬ったことだ。